



格清 久美子

The 1918 SHIKOKU PILGRIMAGE OF TAKAMURE ITSUE: An English Translation of Musume Junreiki は、スーザン・テナント氏による高群逸枝著『娘巡礼記』（堀場清子校訂、朝日新聞社、1979年1月）の英語によるはじめての全訳である。原著は、1918（大正7）年6月4日～11月20日、著者が24歳の時行った四国遍路の道中記を『九州日日新聞』（現『熊本日日新聞』）に105回にわたって連載した新聞記事を編集出版したものであるが、『高群逸枝全集』全10巻（理論社、1965年6月～1967年2月）には収録されず、高群逸枝（1894–1964）の没後15年目によく日の目を見た¹。ただ、その文体は、難解な漢語、仏教用語などが多用され、文語体による書簡、自作の短歌、御詠歌等が挿入されているため、現代の日本人にとっても決して読みやすいものではない。テナント氏は、この厄介な作品を精読し、的確で自然な英文によって再現した。その意味で、英語版『娘巡礼記』は、外国人ばかりではなく、日本人読者にとっても有益な一作になるとと思われる。

本文は、堀場清子の編集にならって105編の記事を三章に分けて構成され、Section 1: Departure [Article 1～Article 32] では、熊本出発から大分までの道中記と同行者となる伊東宮治（伊藤宮次とも表記）老人との出会いと同家滞在記、Section 2: Heading to Shikoku at Long Last [Article 33～Article 80] では、高知の43番明石寺から徳島の1番霊山寺までを逆打ちで巡る四国遍路記の前半、Section 3: Along the Inland Sea [Article 81～Article 105] では、香川の88番大窪寺から44番大宝寺までを巡る遍路記後半が訳されている。所々原文中の改行が省略されて

いるのは、英文では不自然に見える細切れの段落を文意にそって再構成した結果であろう。末尾には、四国遍路の地図（Map of the Pilgrimage Route）と解説（What is the Shikoku Pilgrimage?）、高群逸枝の簡単な伝記（Who was Takamure Itsue?）と海外における高群逸枝研究の一端とその重要性に関する小論（The Importance of Takamure's Account）、ならびに短歌と御詠歌（*Tanka* poems and *Goeika* hymn）、用語解説（Glossary）、参考文献跋（Selected Bibliography）が付けられている。これ以外にも、本文中に散見される日本語の難解な慣用句やことわざ、人名等に丁寧な脚注が付され、日本の文化に馴染みの浅い外国人にも文意が理解できるような気くばりがされている。

翻訳者のスーザン・テナント氏は、英語を母語とするカナダ人で、ブリティッシュ・コロンビア大学で日本語を学んだ後、第二外国語英語講師として、東京（1年）、徳島（5年）、宮崎（1年半）等、日本各地の大学で教えた経験がある²。しかし、日本文学や女性史の専門家ではなく、高群逸枝の遍路記との出会いは、徳島赴任前、四国遍路に関心をいだいて読んだOliver Statler著 *Japanese Pilgrimage*（Charles E. Tuttle Co, 1984）によるという。Statlerは、占領期に日本に滞在し、日本近代版画の収集や *Japanese Inn*（Random House, 1961）³等の著作で知られるアメリカ人であるが、帰国後もたびたび日本を訪れ、四国遍路（八十八ヶ所札所巡り）は、1961～71年の滞在中に二度（1968, 1971）完遂した。この経験と豊富な知識によって執筆されたのが *Japanese Pilgrimage*⁴であるが、Statlerは、全22章中、約一章を割いて高群逸枝の生涯と遍路記の一部を紹介している⁵。テナント氏自身も、徳島在在中、

札所巡りを体験し、AWAHENRO: a bilingual guide-book for pilgrims in Tokushima (『阿波遍路: 日英対訳(阿波) 遍路ガイドブック』AWA88, 1993)の編纂にも協力した。Statlerの著書の影響だけでなく、遍路の経験とこのガイドブックの出版が、『娘巡礼記』の翻訳に生かされたことはいままでのないであろう。

『娘巡礼記』翻訳の背景には、このように、外国人による四国遍路の本格的な紹介と大正期の女遍路高群逸枝への注目があつたことがうかがえるが、この時期は、高群逸枝研究においても、海外の研究者による研究成果が充実し始めた時期であった。Andrea Germer (2003)が指摘している⁶ように、海外における日本女性史研究は、言語や地理的な限界により遅れがちであったが、1980年代は、高群逸枝研究を見る限り、日本語を読みこなして偉業ともいべき業績にせまろうとする研究者が増えている。たとえば、E. Patricia Tsurumi (1985)は、高群逸枝の生涯を克明にたどりながらその全体像にせまり、男性社会への従属を認めず女性の理想社会を追求し続けたアナキスト的姿勢の一貫性を評価し、高群をその後のフェミニズム運動の偶像的存在として位置づけた⁷。90年代に入るとさらにテーマごとに掘り下げた研究が見られるようになる。たとえば、Katsue A. Reynolds (1994)は、「歴史学者」(女性史研究者)としての高群の思想形成を生い立ちや夫橋本憲三との関係性を視野にいれた生活史を中心に考察し⁸、Ronald P. Loftus (1996)は、『火の国の女の日記』を20世紀初頭の日本人女性の「自己語り」の一例として考察し、その歴史的意義を問うている⁹。一方、Sonia Ryang (1998)は、「放浪者の詩」や女性史研究に見られる高群の朝鮮人へのまなざしについて考察しているが、これは、日本を東アジアの一国として見るより広い視野から高群逸枝を捉えようとするポストコロニアル批評の一つとして注目される¹⁰。

これら海外の研究動向の中で、『娘巡礼記』は、研究対象としてほとんど注目されてこなかったが、これはおそらく、刊行が遅れたことと四国遍路という特殊なテーマ、若書きによる未完成な文体(方言を交えた独特の日本語表記)が原因とも考えられる。しかし、この遍路記は、通常の日誌的記録文学とはやや性格が異なる。それは、105編のすべてが連載記事として『九州日日新聞』に発表され、九州一帯に多くの読者を獲得し、彼らが

記事の登場人物になる場面もあるからである。高群が四国遍路に至った動機については、一概にはいえないが、一般には、橋本憲三との確執と複数の男性の登場による精神的苦痛と混乱、あるいは貧困による肉体的疲弊からの現実逃避が主な要因であったようにいわれている。しかし、現実逃避やいにしへの放浪歌人へのあこがれだけではこの種の記事は書けないだろう。『火の国の女の日記』には、熊本の貧困時代に読んだJohn Bunyan (1628-1688)の『天路歷程』(1678-1684)が「天啓的に、どん底脱出への誘いと、大きな勇気を与えてくれた」という記述があり、キリスト教的巡礼への憧れが引金になった可能性もある¹¹。『娘巡礼記』の大分滞在中の僧侶との対話からも、弘法大師への帰依より、汎神論的な「神」との同一化を理想とする姿勢が読み取れる¹²。『娘巡礼記』は、これらの思想的背景を持つテキストであることを念頭に入れて読む必要があるように思われる。

『娘巡礼記』のもう一つの特徴は、四国八十八ヶ所巡りを寺ごとに詳細に記録するというより、遍路中に起こるさまざまな出来事への感想や、自身の精神的苦悩の記述が大半を占めていることである。大分滞在記が全体の3分の1を占めるのもその理由からであり、高群は、事実、道中の重い荷物を同行の老人に背負ってもらい、修業とよばれる遍路独特の物乞いもほとんどしなかった。また、徳島の札所巡りは、平地が多いため、短期間で駆け抜け、香川に入る前の18番恩山寺から1番曇山寺は記録さえ残していない。善根宿や木賃宿で同宿した遍路たちの描写は、一種のルポルタージュともいえるが、そこには、嫌悪や偏見に近い記述もあり、不幸な人々への同情と同時に差別意識も垣間見える。橋本憲三が生存中も没後も出版を見合わせた理由はこの「未熟さ」にあったと思われるが、のちにアナキストとなり、女性史研究者として偉業を成し遂げていく高群逸枝の思想的萌芽を見る上で、『娘巡礼記』は貴重なテキストといえる。テナント氏は、高群逸枝の『娘巡礼記』を紹介した記事において、巡礼の持つ通過儀礼的意義に言及している¹³が、『娘巡礼記』は、まさに、若き日の高群の過渡的変成過程を示す一種の「自己語り」として読むこともできるだろう¹⁴。その意味でも、英訳『娘巡礼記』は、高群逸枝のより開かれた研究をめざす一つの指標として、海外の研究者ばかりでなく、日本の研究者にとってもより多くの示唆を与えてくれるにちがいないと思われる。

(*The 1918 SHIKOKU PILGRIMAGE OF TAKAMURE ITSUE: An English translation of Musume Junreiki*, translated by Susan Tennant, Bowen Publishing, 2010, 268 pages.)

1

オンデマンド版(2002)、岩波文庫(2004)もある。『お遍路』(厚生閣、1938年、中公文庫、1987年)は、高群逸枝が遍路当時の手記と記憶を元書きおろしたもので、『娘巡礼記』とは別ものである。

2

名古屋では、3年半、名古屋大学大学院国際開発研究科で助手を務めた。

3

出版当時人気を博し、日本語訳もある。三浦朱門訳『ニッポン歴史の宿』、人物往来社、1961年12月。

4

グッゲンハイム奨励金(1973)と客員教授をつとめたハワイ大学の研究費(1977)を得て調査執筆したという。

5

ただし、これらの記述は原典が不明で、原文に照らすと、『火の国の女の日記』、『娘巡礼記』等の一部を翻訳して再構成したものようである。Statler, 1984, pp.273-293。

6

"Feminist History In Japan: National and International Perspectives," *Intersections: Gender, History and Culture in the Asian Context*, issue 9, August 2003.

7

"Feminism and Anarchism in Japan: Takamure Itsue, 1894-1964," *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, Vol. 17 (2), pp.2-19, 1985. Jeanette Taudin Chabotも同様に、高群の女性史研究を高く評価し、後世の「日本人女性にとって暗中の星」とまでたたえている。"Takamure Itsue: The first Historian of Japanese women," *Women's Studies Forum*, Vol. 8, No. 4, pp. 287-290, 1985. ただし、日本では、高群の女性史研究に賛否両論があり、近年は、その一部の資料に「意図的な操作」があったことが綿密な論証により指摘されている。栗原弘『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』高科書店、1994年。この指摘は、高群を好意的に評価してきた鹿野政直を「驚愕」させたという。『高群逸枝語録』岩波書店、2001年1月、p.25。

8

"Conflict and Resolution: Takamure Itsue as a Woman Scholar," *Women in Hawai'i, Asia and the Pacific*, The Office for Women's Research Working Papers Series, Volume 3, 1994, pp. 37-44.

9

"Female Self-Writing: Takamure Itsue's *Hi no Kuni no Onna no Nikki*," *Monumenta Nipponica: Studies in Japanese Culture*, Vol. 51, No. 1, 1996, pp.153-170.

10

"Love and Colonialism in Takamure Itsue's Feminism: A Postcolonial Critique," *Feminist Review*, No.60, Autumn, 1998, pp. 1-32.

より開かれた視点を持つ日本語の研究書としては、「高群思想の全貌が明らかにされるのは、歴史学というくびきから解き放されたときだろう」という発想から書かれた丹野さきら著『高群逸枝の夢』藤原書店、2009年1月、を参照されたい。

11

『火の国の女の日記』理論社、1976年、p.138。

12

「自己は宇宙の一部であると同時に又全部である」という立場から、自己を「無」にして仏の慈悲にすがらるべきだという僧侶と対立している。『娘巡礼記』オンデマンド版、pp.76-79。『お遍路』(1937)では、凡人は「祈り」しかないとして、「シェリー・ブリュウドムの詩」の「絶望の祈り」や「底知れぬ淵」を見る人間のはかなさを詠ったヘルダーリンの詩のモチーフへの共感を示している。しかし、高群は、このあと、シェリーが希求した老人の衰弱の上に輝く理性を「寂光浄土」とし、鴨長明の「方丈記」へと一足飛びに飛躍してしまう。「わが祈り」、『お遍路』中公文庫、pp. 112-117。

13

"The Liminal Journey of Takamure Itsue: An account of a young woman's pilgrimage," by Susan Tennant, http://limen.mi2.hr/limen1-2001/susan_tennant.html.

14

Ronald P. Loftus流にいうなら、『娘巡礼記』は、24歳の高群逸枝が、何をどこへ向けて発信しようとしたのかを問う貴重な資料ということもできるだろう。